



見事な演奏で観客を楽しませてくれました（最上中吹奏楽部 `町民感謝コンサート、12ページに関連記事）

## ■ 今月の主な内容

- 町民フォーラム P.2
- 生徒たちが模擬選挙を体験 P.6
- 東日本大震災 P.7
- 自然環境現況調査会 P.8
- まちの話題 P.10
- ふるさと日記 P.12
- 町職員給与のあらまし P.16

今月の納税は、**固定資産税第4期**と  
**国民健康保険税第6期**です。

みんなでつくろう、安全、安心の街  
**年末地域安全防犯運動** 実施期間**12月1日(木)～31日(土)**

※次回の年金相談日は**1月10日(火)**です。

元気なまちづくり町民フォーラムを開催

元気なまちをともにつくろう！

絆、連携をまちづくりの源泉に

### 第1部町定例表彰式

最上町定例表彰を受けたみなさん

※敬称略



#### ○功勞表彰

- 金田 常也(向町六)
- 庄司 貞通(瀬見一)
- 杉沼 五郎(向町四)
- 後藤 一男(野頭)
- 佐藤 真理(向町二)
- 中嶋 紀念子(向町三)
- 佐藤 啓子(笹森)
- 森 生子(新田一)
- 阿部 十力子(向町六)
- 八 欽 兌(月楯二)
- 菅 利勝(法田下)
- 佐藤 征太郎(向町二)
- 中嶋 勉(若宮)
- 伊藤 隆生(若宮)
- 斎藤 和則(満沢一)
- 斎藤 勲(法田中)
- 石山 繁雄(野頭)
- 高橋 光一(沢原)
- 早坂 勇(上鶴杉)
- 菅 勝見(法田中)
- 矢作 由紀恵(向町一)



▲功勞表彰を受けたみなさんと高橋重美町長（前列中央）

#### ○善行表彰及び感謝状

- 有限会社 中村商店 代表取締役 中村 尚仁
- 医療法人 永井医院 理事長 永井 俊一
- 株式会社 大場組 代表取締役 大場 利秋
- 有限会社 山口畜産 代表取締役 山口 登
- 株式会社 最上振興 代表取締役 佐藤 隆
- 株式会社 北山建設 代表取締役 北山 治壽
- 大場・北山・鈴木特定建設共同企業体 代表構成員 株式会社 大場組 代表取締役 大場 利秋
- 柴崎 茂夫(新庄市)
- 笹森生産組合長 青木 文二門
- 清水町生産組合長 岩本 利秋
- 本城十日町共有林組合長 二戸 孝義

### 最上町産業賞表彰

株式会社いとうぐみ

農業生産法人もがみ

グリーンファーム株式会社

高原の茶屋

### 最上町体育協会表彰

#### ○殊勲賞

- 道都大学2年(北海道) 佐藤 悠人(瀬見出身)
- 神町自衛隊 有路 圭佑(月楯出身)
- 羽黒高校3年 大場 琢文(上鶴杉)
- 羽黒高校2年 吉田 榛華(月楯一)
- 羽黒高校1年 結城 未来(野頭)
- 大堀小学校6年 内構 拳斗(志茂)
- 向町小学校6年 阿部 拓馬(沢原)

11月23日、「元気なまちづくり町民フォーラム(町定例表彰式、町民フォーラム、明日をきずく青少年のつどい)」が中央公民館大ホールで行われ、約300人が参加しました。

『定例表彰式』では町のために貢献していただいた方々が表彰され、競技で優秀な成績を収めた方々が表彰され、会場のみなさんからお祝いの拍手が送られました。

ロビーには、集落や各種団体等が行なっている活動のパネルが展示され、来場者は、一つひとつ目を凝らしながら見入っていました。また、自然環境現況調査会の井上義彰会長も貴重な冬虫夏草の写真と標本、子育てをする鷹(ノスリ)の珍しい写真を展示してくれました。



▲当日、体育協会表彰を受賞したみなさんと体育協会の菅義治会長（前列右から2人目）、高橋町長



▲善行表彰、産業賞を受賞したみなさんと高橋町長





## 第2部 町民フォーラム

基調  
提言  
要旨

### きずな・つながり再興への地域づくり

高崎経済大学地域政策学部 准教授 櫻井常矢氏

#### 1 提言 外に開かれた きずなづくりを

本日、私が最上町のみなさんにお伝えしたいのは、『自己完結することの限界』ということ。自分たちの集落や地域だけで頑張ろうとする、あるいは町のなかだけで何とかしていこうとすることに、もはや限界があると思います。これは、私自身が被災地に通い続けて感じたことです。やはり、今回の大震災のようなときに、最初に支援の手が届くのは、「ご縁」によるものなのです。

岩手県の海沿いにあるわずか三十世帯の小さな集落ですが、地震発生から一週間ほどで『食べ物はない』『もういらぬ、布団ももういらぬ』というぐらい全国からたくさんの救援物資が届いたそうです。

その一方で、隣の集落には何の物資も届けられなかったという事例があります。その違いは何でしょうか。三十世帯の集落は過疎化や高齢化対策として、これからは「外とつながっていくのが大事だ」ということで、東京や仙台の大学やNPOと交流する機会をたくさんつくっていたとのこと。

#### 2 提言 丁寧な人間関係づくりを 地域づくりの目標に

今般の大震災を教訓にしたまちづくりを考えますと、「開放性のあるコミュニティづくり」「外に開かれた地域づくり」を実践していく必要があります。

地域での防災や防犯にむけた訓練は大事ですが、『なんか悪いものいねーか』といった活動はよくありません。防災活動や防犯活動を通して、丁寧な人間関係を育んでいくことが、これからの地域づくりには必要です。

防犯活動を例にあげると『怪しい人が通学路にいないか』ではなく、通学路を通う子どもたちにも、大人たちが丁寧に声をかけを行うことです。また、防災訓練では『あそここの一人暮らしのばあちゃんどうしている』ということだけでなく、人々との全体的なつながりを大事にするということです。

地域内でのつながり、そして地域外とのつながりが、最大の防災・減災であるということ、最上町のみなさんにお伝えします。



櫻井 常矢 (さくらいつねや) 氏

地域づくりの過程を重視したさまざまな調査や実践活動を全国各地で展開。最上町自治協働のまちづくり推進本部のアドバイザーを務めるほか、東日本大震災の被災地に数多く足を運び、継続的な支援活動を行なっている。

ていだん  
鼎談  
要旨

### きずな 絆、連携を まちづくりの 源泉に

登壇者  
叶谷 貴徳 氏  
福島県浪江町  
笠原 栄  
最上町役場総務課長  
櫻井 常矢 氏  
コーディネーター



叶谷貴徳 (かのうやたかのり) 氏  
福島県浪江町出身。大震災により、3月から8月までの約半年間、最上寮等の避難所で生活をおくる。9月から東京で単身で就労している。

#### 叶谷貴徳氏の発言概要

3月11日の大震災で、真っ先に考えたことは『とにかく家族と漁船を守ること』でした。ほどなくして、漁船を海岸にしつかりと固定しなければと思い海岸へと向かったのですが、私より一足先に港を見に行った漁師仲間から「津波が来るぞ」と言われ、すぐに引き返しました。

今にして思えば、あのとき仲間からの声掛けがなかったら、私の命はなかったと思います。

まとめ  
要旨

〈コーディネーター〉  
高崎経済大学地域政策学部  
准教授 櫻井常矢氏

最上町内において、集落間の連携、あるいは集落の中で民生委員さんや公民館長さん、区長さんとの連携は、しっかりとれているのでしょうか。やはり身近なところでの連携ということが必要であり、今回の大震災に学ぶべき点であると思います。縦割りで動いている場合ではないのです。地域の力、面としての力としていくことが、何よりの防災・減災につながるのです。



これからの地域づくりは、いかに地域の大人たちが自らの地域にこだわりを持ち、絆を強めていかなければならないのかという事です。日々の様々な取り組みのなかに、『地域のつながりを育む』ということを大事にして欲しいと思います。



災害や防災のための訓練が大事なのではなく、訓練を通して、あるいは災害時の備えへの議論や話し合いの場を通して、人々のつながりを強めていくことが大切なのです。

安全神話というのはない、というのを前提にしながら、改めて地域のつながりを育てていくことを大事にしてください。

最上町に避難してきたのは、3月16日でした。最上町のみなさんは、町長さんをはじめ本当に温かい人ばかりで、いろいろな場面で助けていただきました。感謝の気持ちでいっぱいです。

でも、4月頃までは物事を前向きに考えることができず、これから自分は何をなすべきか、ずいぶん悩みました。今まで「漁師一筋20年」が自慢でしたが、やはり漁師は丘に上がったら、ただのカッパですね。本当に何もできない自分を責めたりもしました。

そんな自分が、浪江町の復興のためにと考え、大型免許と大型特殊免許を取得し、地元建設業者の大場組さんに、重機オペレーターとして勤務させていただきました。ところがようやく仕事にも慣れはじめた矢先、我が浪江町は放射能の影響で立ち入り禁止になってしまったのです。

今は、浪江町に戻ることをおそらく、単身で東京で働いておられますが、近々家族を呼ぶことにしております。

本日、この席から最上町のみなさんに伝えたいことは、『災害は決して他人事ではない』ということです。私自身、浪江町は災害とは無縁であると勝手に信じ込んでおりました。でも現実には、そう思っていた町民の多くが尊い命を失いました。

ですから、週に一度でもよいので、災害に対する意識づくりや災害が起きたときの対処法やルールなどについて、家族全員で話し合ってくださいと思います。



笠原栄 総務課長の  
発言概要

〈大震災から得た課題〉

この度の大震災で、町民のみなさんに大変ご迷惑をおかけしたのが『災害情報の提供』でした。震災による停電後、何回か防災無線で放送しましたが、屋外スピーカーのバッテリーが3時間程で切れてしまったことが、その大きな理由です。

この反省点を生かし、今後、携帯電話を活用した緊急情報提供の整備や防災無線放送の室内受信が可能なラジオの普及推進にむけて、検討してまいります。

次に、災害発生時における対応策のマニュアルづくりと、これに即した訓練の実施とい

う点についても、具体的な手立てを講じていかなければなりません。

町では「地域防災計画」の見直し作業を行なっておりますが、これと連動して、集落の自主防災組織を中心とした災害発生時の対応マニュアルづくりと、防災訓練の充実を図る必要があります。

地震発生後で情報が不足するなか、安否確認のパトロール等で特に大きな力を発揮していただいたのが、地域の「消防団」ではなかったでしょうか。

消防団は若い人たちの組織です。この若い団員のみなさんが集落内の一軒一軒を訪問し、「大丈夫ですか」と、元気に声掛けを行なってくれたことが、地域のみなさんに大きな安心感を与えてくれたのではないかと思います。

そういう意味において、消防団の団員確保が大きな課題であるとともに、消防団を核にした地域防災のあり方についても、今後、検討してまいりたいと思います。

また、継続性のある被災地への支援にむけて、人、物、文化が行き交う活動を推進するほか、再生可能なエネルギーについてもその実用化にむけて積極的に推進し、持続可能なまちづくりに生かしてまいりたいと思います。



# 東日本大震災

## 震災復興のために

### 瀬見温泉旅館組合

11月15日、瀬見温泉旅館組合のみなさんが役場を訪れ、被災地の震災復興のためにと笠原栄総務課長に義援金を手渡しました。

瀬見温泉旅館組合では、被災者を対象としたリフレッシュプランで多くの利用者があったことを笠原総務課長に報告しました。その後、組合で話し合い、「これからも被災地と被災者に支援は必要。我々にできることをしよう」と、義援金を町に託したものです。



▲右から高橋裕さん、八楸茂樹さん、笠原総務課長

## 気仙沼市本吉町との絆

### 黒澤餅搗き唄保存会



▲餅きりの早業にみなさん「おーっ」と驚いていました

11月23日～27日までの5日間、「前浜おらほのとつておき2011」が気仙沼市本吉町天ヶ沢住宅集会所で行われました。

このイベントは、住民のみなさんが、『震災前にやっていたことを、震災後も普通にやろう』と復興への足がかりとして開催したものです。本吉町の方から、是非、最上町の方も連絡があり、26日、本吉町と交流のある黒澤餅搗き唄保存会と有志のみなさんが炊き出しを行なってきました。

## 大谷大漁唄い込みを共演

### 大谷大漁唄い込み保存会・あかくら幼稚園

12月4日、前段で紹介した気仙沼市本吉町の大谷大漁唄い込み保存会があかくら幼稚園を訪れ、園児たちと大谷大漁唄い込みを共演しました。

園児たちは、保存会から渡されたDVDを参考に一ヶ月以上練習し、保存会のみなさんに成果を発表しました。その後、保存会のみなさんと一緒に大漁唄い込みを共演し、歌ったり、太鼓を叩いたり、踊ったりしながら、楽しいひとときを過ごしました。



▲保存会のみなさんと園児たちが一体となったステージ

## 避難所、最上寮を閉鎖

### 利用された方、延べ38人

11月30日、4月6日から町災害対策本部が旧最上寮に設置していた東日本大震災の避難所を閉鎖しました。

震災から約8か月あまりで利用された方は、延べ38人。福島・宮城両県の地元に戻られた方、仮設住宅に移られた方、町内の住宅に入居された方など、退居する際には役場を訪れ、「新たな一歩を踏み出す勇気をいただきました。町と住民のみなさんの対応に心から感謝いたします」とお礼の言葉を残してくれました。

最上寮は、避難所として開設する際、多くの住民と最上中学校の生徒たちが部屋の掃除をしてくれました。また、医師の健康観察、食事や食材の提供、美容サービス、ヴァイオリンや歌のコンサート、映画上映、医療や学用品の提供等、多くの方々にも多種多様な内容のボランティア活動で支えていただきました。

町では、引き続き災害対策本部が中心となり、震災復興に取り組むと共に、住民の安全・安心確保に向けて、努力していきます。

## 当町の空中放射線量は、人体に影響はありません（12月14日現在）。

計測は、旧瀬見小・大堀小・最上中・赤倉小のグラウンドの4箇所で、地上50cmと1mの地点で行なっています。計測値は、0.06～0.08μSv/h（マイクロシーベルト/時）の間となっています。